
微雅

若菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微雅

【Nコード】

N7395C

【作者名】

若菜

【あらすじ】

仲間内で殺しあう事で力を増してきた一族と、そこで必死に生きようとする少女の物語

プロローグ

微雅^{カスガ}は世界一といわれる戦闘集団。

集団……といっても全ての者が微雅を名乗り、正式には微雅の一族（微雅家）とされていた。

微雅の一番の特色は人から生まれないこと。

微雅の地には産水^{サンスイ}と呼ばれる泉がいくつもあり
そこに年間五百前後の魂がおち、やがて肉体を持つ。

微雅に生まれた者は最初に名と部屋を与えられる。

ここで一人の微雅を紹介しておこう。

朱臣^{スオミ} 恋^{レン}。

先にいったとおり朱臣は泉名^{センメイ}で恋が個人の名。

この者がこの物語の主人公にあたるのだが、微雅の味方とは限らず、必ずしも信用できるわけではないことを覚えておいていただきたい。

嘘と策略の渦巻く中、微雅として生きる者達の生き方をご覧いただくことにしよう。

死舞 第一話

スオミ
朱臣 恋

好きなこと 遊び

嫌いなこと 人を傷つけること

よく言われる言葉 万年最下位・まだ死なないの？ 等

ゴーンゴーンゴーン

「うーもう朝？」

午前六時、微雅^{カスガ}全土に鐘が響き渡る。

三つの鐘の音、起きろという合図。

この合図を聞いて微雅のほとんどの者が目を覚ます。

昨晚二時まで起きていた恋も例外ではない。

恋はまだ眠り気味の頭をたたき起こし日付を確認する。

微雅の一年は三百六十日（十二月で、一ヶ月三十日）。

五日周期で行動が定められているため日付の確認は欠かせない。

ゴーン（六時十分）

「……っと朝食の時間か」

二回目の鐘。

この鐘がなるまでに朝食が各部屋に運ばれる。

運ぶのは下人^{ゲニン}と呼ばれる正式名称^{ソト}拒人。

微雅の戦闘社会から抜けた、雑用等をする者達。

恋は昨晚した知火^{チカ}（自分の好きな分野）の勉強の復習をしつつ食事をはじめた。

そして食べ終わると、着替えをしつつまた復習。

「この前の試験また落としたからなー、何とか一つはとっとなないと」

身支度を終えて、本格的に勉強を始める。

ゴーン（六時三十分）

三回目の鐘が鳴り終わると、だんだん外がにぎやかになってくる。

今から三十分後に表で朝儀チヨウギがあるため、朝の準備を終えた者達が集まっているのだ。

さあそろそろ出ようかと恋が道具の片付けを始めると、外から呼びかける声がした。

「恋ーまだー？」

「ちゃんと生きてるかー？」

朝からうるさいなあと思いつつ恋は急いで片付けを終わらせ、戸を開けた。

朝儀などほとんどのことは同じ歳の者で行い、だいたいどの年齢も四百名ほどいる。

普通は姓で呼び合うが、恋は十四歳の中で一番弱いとされていて、下に見られているというのが名で呼ばれる最大の理由だ。

外には既に二百ほどの人が朝儀までの時を過ごしていた。

「もう、かってに殺さないでよね」

声をかけてきた二人は笑いながらこちらを見ている。

どちらも十四歳内での強さは中ほどで、男の子が災支サイシ 圭ケイ、女の子は白水ハクスイ 散仕サンシ。

暇なときに雑談するくらいの仲だ。

恋は出てすぐの柱に寄りかかった。

二人が側によってくる。

「恋、また眠そうだね」

「どうせ深夜まで勉強してたんだろ。試験一つもとれてないの恋だけだし」

「う……まあそんなとこかなー」

恋達が話をしていると、少し離れていたところで話をしていたグ

ループの一人が近づいてきた。

「やっほー、恋ちゃん元気ー？」

シュウハク
周伯 航里。

彼女はこの歳で二番目に強いとされている。

「ねえ、恋ちゃん今日の戦（セシ）（五日に一度行われる同じ歳の一人と戦うこと）私としない？」

「えっ？」

「一回したかったんだよねーそれとも先約ある？」

「そっそうそう白水とするんだよ、ね、白水」

「そうだった？」

「うん！」

白水は少し悩むと周伯をちらりと見た。

「周伯としてきたら？」

「え……」

「はい決まり。じゃ、朝儀終わってからねー。逃げちゃだめだよー恋ちゃん」

戦の相手が決まったところで、周伯は元のところに戻っていった。

「……白水ー私を殺す気？」

「大怪我しないようにがんばってねー」

「そんなー。災支も黙ってないで助けてくれてもいいじゃん」

「あー。まーがんばれ」

（しょうがないか、結局二人も周伯と争いたくないんだもんね）

その後しばらく二人の励まし（仮）を恋が聞いていると、突然あたりのざわめきが大きくなった。

ショウキ
十四歳の長抄基 ケイハク
啓魄が来たのだ。

時は六時五十分、朝儀の始まる十分前。

もうほとんどの者が集まっていた。

抄基はまっすぐ前を向いて廊下を歩いていたが、恋のところで立ち止まった。

白水と災支は恋から離れて、他の者同様朝儀を行う心央と呼ばれる庭に並びに行った。

抄基は水の中で一番強く、頭もいい。

将来かなり有望とされていて、歳の下者には様付けで呼ぶ者もいるほどである。

そのため、ずっと歳と呼ばれる各歳のグループの長をしており、恋が万年最下位と呼ばれるのに対し永年最上位と呼ばれていた。

「恋、きいたぞ。今日の戦周伯とするんだってな」

「どうだっていいでしょ！ それより啓魄、今日は早いんだね」

「そうか？ 他の奴はもう集まってるみたいだが」

「それはそうだけど、啓魄はいつもみんなが整列して朝儀開始の鐘がなつてからくるでしょ」

抄基も恋を名で呼ぶが、まだ上下関係が無かったところからなので差別的意味は含んでいないらしい。

恋もそのころから抄基を名で呼んでいる。

「そんなことより大丈夫か？ 今日入れるとあと四日で死舞だ。今けがでもしたら大変だろ？」

死舞というのは、一年に三回、四月・八月・十二月のそれぞれ十五日に行われる。

歳 of 者の中で一人戦闘不能者、または下人がでるまで続けられる戦いである。

普段仲の良い者達もこのときは自分が微雅に残るために戦う。

殺されそうになったときは、自ら下人になるといえば命は救われ戦いが終わる。

また、生き残ると予想される順位が毎回発表され、抄基は毎回最上位、恋は毎回最下位となっていた。

普通最下位やそれに近い者が微雅を離れるが、恋は当初から最下位でありながらいまだに微雅に残っている。

そのため、恋がいつまで微雅にいられるかと賭けをする者もいる

という。

そして下の方のものを中心に狙うという決まりがある。

元々力の強い者を絞り込むためのものだからだ。

「だから、嫌だと言っててるでしょ」

「今度こそ誰かに殺られるんじゃないかねえのか？　なのに下人申請しねえんだもんな」

下人申請というのは、あらかじめ死舞で重体になったときに下人になることを宣言し、そうなったときに命を見逃してもらい、下人になるというものだ。

「たしかに……私毎回死舞で殺られそうになってるけど、下人になるつもりはないよ」

「下人になるよりは死んだほうがましとかか？」

「別に下人を軽蔑してるわけじゃない！　ただ私が嫌なだけ」

ゴーン

朝儀開始の鐘が鳴る。

「やっぱ、啓魄と話してたんだから大目に見てよね」

恋は急いで中央に並びに行った。

抄基は黙って辺りを見回し、整列している者達の前へ立った。

死舞 第二話

「周伯^{シュウハク}、全員そろっているか？」

抄基^{しょうき}は一礼して歩み寄ってくる副歳長^{サイ}周伯に尋ねた。

「はい。確認済みです」

「そうか。始めてくれ」

「はい。姿勢を正して下さい。礼。これより五月十一日の朝儀^{チョウギ}を始めます。抄基^{ショウキ} 啓魄様^{ケイハク}、お願いします」

「上からの連絡は特にないが、今週の五日目は死舞^{シブ}を行うので、今日の戦^{セン}は特にけがしないように気をつけてくれ。あと、いつも言っているが、必ず一人以上と戦うこと。相手がいない場合は俺に言ってもらえれば探してやる。また、次の死舞の予想が発表された。心央……ここの連絡板にはっておくから自由に見てくれ。以上だ」

「体調の悪い方はこの後私の所へきてください。姿勢を正して下さい。これで朝儀を終わります。礼。解散」

集まっていた者達が一斉に散らばった。

同時に恋は人の間を抜けて走り出す。

もちろん、戦を誘ってきた周伯を撒くためだ。

（冗談じゃない。本当に今日けがしたらやばいんだから。うまく周伯を撒ければいいんだけど）

「恋ちゃん、逃げちゃだめって言ったでしょ？」

陽気な声の周伯が後を追ってきた。

朝儀の時とのあまりの違いに驚くが、恋は今それどころではない。

「うう速い、さすが副歳長」

さらに足を速める恋に、周伯は疲れたのか拗ねたように立ち止まった。

「どこまでいくの？　しょうがないな」

周伯は短剣を取り出し、恋の方へ投げた。

そして、見事命中。

恋はようやく立ち止まって振り向いた。

「……周伯乱暴はだめだよ。普通に痛いでしょ」

「そう？ これくらい慣れてると思ったんだけど」

「なわけないじゃん」

たぶん、と恋は心中に付け加えた。

そんな恋に周伯は一步二歩と近づく。

「じゃ、戦始めよっか」

「ホントにするの？」

「もちろん」

「でも、周伯だったらもっと強い人とした方が……」

「あっそういえば」

（無視された？）

「死舞の順位見てきたんだけど、恋また最下位だったよー。きっとまた狙われるね」

「そうですか」

「……けがするわけにはいかないんだよね？」

周伯は刀を抜いた。

恋は一步後ずさるがすぐ後ろには壁が控えていた。

「ね、なんで私が恋ちゃんと戦したいか分かる？」

「さあ、ね。なんだか派手に怪我させてくれそうだけど」

恋も刀を抜いて向き直った。

「そろそろ狙われ続けるのに疲れたんじゃないかと思って」

「……下人^{ゲニン}になる気はないよ」

「まあそう言わずに。今日のところは少し怪我してもらっただけだから」

周伯の笑顔に暗さが加わる。

「じゃ、いっきまーす」

周伯は恋の方に走って素早く刀を振った。

十四歳といってもさすがは歳第二位。

身のこなしは本物となっている。

恋は刀をギリギリでかわし走り出す。

（戦は死舞と違って制限時間がある。その時まで逃げきれば）
少し引き離すと塀を乗り越えようと反動をつけたため足に力を入れた。

まさにその時。

「だからー逃げちゃだめだって」

すぐ後ろに周伯がせまっていた。

そして軽く、だが速く刀を振る。

恋はとっさにかわそうとしたが、腕を深く切りつけられてしまった。

「……」

「声、出さないんだね。でも慣れてはいても痛いでしょ？　もうちよっと、我慢してね」

（慣れてないんだけど。でもこの傷、結構深い。制限時間までもまだあるし）

「それではもう一発」

（げっ腕上がんない）

周伯は素早く恋のすぐ側まできた。

もちろん刀を構えつつ。

恋はよけようとしてバランスをくずし転倒。

「……っ」

（やっぱりやばい、かも）

周伯が恋の方へと近づく。

「ごっめんね！」

周伯は恋の足を深く切りつけた。

あたりに鮮血が飛び散る。

「……っ」

恋は思わず傷に手をやった。

「痛い……よね？　別に今日は下人になってもらうつもりはなかったんだけど。ね、諦めて下人にならない？　じゃないとその怪我じ

やすぐ殺られちゃうよ?」

「私は……下人にはならない」

出した声は少し情けないものになってしまう。

「そっか。じゃ仕方ない、もう一発しとくか」

右足に深い傷を負った恋に、また周伯が刀を振り下ろそうとした。

「おい!」

廊下のほうから声がした。

「……? その声は、抄基?」

周伯が振り向くとそこには抄基が歩いて来ていた。

「周伯、そのへんでやめてやれ」

抄基の口調は静かで、血を流す恋に動揺した様子はない。

周伯も、あっさりと構えをといた。

「まあ抄基が言うんなら」

周伯は一步引いて恋に向き直る。

「それじゃ、……恋ちゃんまたね」

すぐに廊下へあがり、見えなくなる。

残された恋は傷の痛みには構わず立ち上がろうとする。

すると、抄基に手で制された。

「派手にやられたな。大丈夫か?」

「あはは……ちよっときついかも」

「ったく。……周伯は今度の死舞でお前を下人にするつもりらしいな。自身の手で」

「それはそれは、副長自ら……か」

「下人申請やっぱりしないか? それにもし死舞で意識を失ったりしたら、恋の意思に関わりなく目覚めたときには下人にさせられるってこともあるし」

「それが問題なんだよね」

死舞では戦闘不能になった者には二択が提示される。

死ぬか下人になるかだ。

しかし気絶状態などになると、歳の者の多数決で決められる場合がある。

恋は下人にはなりたくないため、そこだけには気を配っていた。そしてこの話題をそらそうと慌てて話を振る。

実は前から気になっていた事でもある。

「ていうかさ、周伯って朝儀と普段変わりすぎじゃない？」

今更な指摘に抄基は肩をすくめた。

「一応仕事の時はきちんとするんだろ。それより怪我の手当てしねえと。誰か下人呼ぶか？」

「あつ樟静部屋に呼んでくれない？」

「圭 樟静か。それはいいが、部屋まで行けるのか？」

「うーん。頑張るしかないみたい」

「……無理したら本当に死ぬぞ？」

抄基はそう言って恋をなんとか立たせ、恋の前に背を向けてしゃがんだ。

「乗れ。部屋までおぶってやるから。」

「いいよ、そんなの」

ゴーン

戦終了の鐘。

この後もお互いに続けたいと思えば続けられるが、片方が断れば強制は出来ない。

恋はその音を聞いて、助かったと改めて息をついた。

しかしすでに大怪我をしているのは事実だ。

「じゃあ圭を呼んでやらねえぞ？」

一人では、帰れそうにないし、手当ても必要だ。

「……お願いします。」

恋は抄基の背に乗った。

抄基はすぐに立ち上がって、普通に歩くときと同じ速さで恋の部屋まで向かう。

そして、廊下ですれ違った下人に樟静を十二歳朱臣スオミの部屋まで来るように伝えさせ、まっすぐに部屋に着いた。

抄基は静かに戸を開けると無言で恋を下ろした。

「圭が来るまでおとなしくしとけよ。じゃあな」

抄基が部屋を出るのを確認して、恋は一息ついた。

「……っ」

髪留めの紐で傷口を巻いてはあるが、応急処置にもなっていない。

（何とか怪我治さないと……。死舞まで今日入れて……。四日）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7395c/>

微雅

2010年11月12日16時30分発行